



かじ かわ より たけ  
● 梶 川 和 武 さん

具漁法の研究に携わってきた。期待する。

「小型底曳網における網口設置型混獲削減装置の開発と分離機構に関する研究」で2013年、東京海洋大学の博士号を取得した。「海洋生物の行動生態を利用した漁獲機構の導入や漁網の網目によるふるい分け効果の利用などによる魚種、サイズ選択は、小型魚保護は、小笠原群島の浮沈式養殖の調査プロジェクトにも取り組む。イケスの沈下で表中層に分布する赤潮プランクトンを避けられ、夏場の海面水温の上昇による被害も回避できる。」

## 漁具での資源管理に利点



て出口規制 無駄な海洋投棄の根絶、水の資源管理 揚げ後の選別作業の軽減、が進められ 高鮮度保持にもつながる」と、資源管理での技術的規制の有効性を話した。

「昨年12月に7日間、山口県下の2そらびき底びき網漁船（大臣許可漁業に乘船し調査した。冬の日本海特有の海況の時もあり、酔いこそしなかったが、現場では調査機材のトラブルもあり、手間取ってしまった」と話した。

操業海域まで出港から約7時間。網入れして2時間曳（えい）網。水揚げして1隻が魚種選別し魚箱に仕立てる。この間に1隻が網入れ。操業中はこの作業が繰り返される。

同じ漁場を利用する隣県種・サイズ選択可能な漁員との資源管理を提案しては解を寄せる。

この時に重要となるのが行政の支援や協力。どうしキーを楽しんだ。妻は摂南大学の副島久実准教授。1970年埼玉・所沢市生まれ、54歳。

（川邊）

「沖合底びき網漁業」中、「対象魚を100%漁獲できる保証はなく、95%の漁獲が確保されたとしても、漁業者が技術的規制を受け入れにくいケースがあることも理解できる」と話した。

茨城・つくば市で育ち、父親が海洋温度差発電の研究も大臣許可だからなどと縦割りを取り組みがちだが、隣県や地域経済なども考えて、もう少し国・地方

